

山紫水明



奉祝 天皇陛下御即位

令和

初春の令月にして
気淑く風和ぎ

梅は鏡前の粉を披き
蘭は珮後の香を薫す

第137号



第一三七号 目次

表紙

退任のご挨拶

近代以降の「元号」について

天皇皇后両陛下御入洛御奉送迎

平成の御代 府内各社への行幸啓

今上陛下御即位三十年奉祝式典

沖縄・京都の塔慰霊参拝団研修旅行

神職さんと行く伊勢参宮

OB懇親会

臨時総会・新年会

委員会報告

近畿地区報告

中央報告

編集後記

24 23 18 14 12 11 10 9 8 6 5 4 3 1

退任のご挨拶



先ず以て謹んで聖寿の万歳と皇室の弥栄をご祈念申し上げます。本年五月一日、「平成」より「令和」に御代が引き継がれ新帝陛下が御即位されました。日本国民の一人として心よりお祝い申し上げます。

さて、平成二十九年七月に櫻井前会長の後を受け会長の大任を仰せつかつてより、早いもので二年の月日が過ぎ、間もなく任期を終えようとしております。

この二年間、言い方は少し乱暴になってしまいましたが、率直に申し上げますと、何が何やら分からぬままに、追われるように奉務神社の社務と当会の会務に明け暮れた日々でありました。しかしながら、まだまだ浅学菲才の身である私のような者が会長であらうとも、様々な活動が活発に行われ、どの事業も恙なく執り納めることができましたことは、一番近くで支えて頂いた頼れる執行部・役員の皆さん、当会活動に格別のご理解とご協力頂きました関係神社の皆様、協賛業者の皆様、そして、各委員会活動に積極的な関わりもつて取り組んで頂いた会員各位のお蔭であると心より感謝致しております。本当に有難うございました。

更に今、この二年間を振り返り感ずるところは、私にとって京都府神道青年会に真正面から向き合えた、充実したものであったということです。周りの方々には、多々不安な気持ちにさせてしまったかもしれせん。歴代の会

会長 六人部 是充

長を務めてこられた先輩方には到底及ばなかったかもしれませんが、一歩ずつ、一歩ずつ、歩みは遅くとも自分なりに地に足をつけて務めることができたのではないかと自負しております。

活動方針にも記しておりました、

「古より伝えられてきた大切なものを守りつつ、次世代を見据えた新たな風を吹かす」

というその思いは、会員向け機関紙『洛声』の発行、様々な教化活動、新規事業用品の開発、京都府神道特製力レンダーの製作、神社境内をお借りしての募金活動、皇室関連施設の清掃奉仕、親睦ボウリング大会の開催、広報誌『山紫水明』の発行など、もはや伝統ともいえる骨格をなす活動に、新たにSNSの活用、余興の逆ビンゴゲームなどが加わり、それぞれのキーワード（コトノハ）を聞くだけで、その時の様子が目に浮かびます。ささやかな私の達成感となっております。

そして七月からは、愈々新体制が始まります。二月の臨時総会において次期会長に選出された大將軍八神社の生寫紀之君は、今期副会長として会員を引っ張り諸活動に取り組んで頂いた、私が信頼を寄せ尊敬する経験豊富な素晴らしい人物です。

どうぞ会員各位並びに各奉務神社様、また関係各位には、今後とも京都府神道青年会に対して何卒ご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

近代以前の「元号」について

五月一日より新天皇の御即位という佳節を迎え、それにともなうて新元号が令和と定められた。はじめて国書『万葉集』が引用され「初春の令月にして、気淑く風和ぎ」という序文は繰り返しニューズで取り上げられた。

余談ではあるが「令」が採用されたことは初めてであるが、「和」は十九回も使われている。大化から現代までで元号に採用された漢字は五百字程度と、そう多くは無いのである。

新元号が発表された四月一日には、多くの国民が元号へ関心を寄せたが、それは元号が自明の理であって、その存在に何ら疑問を抱いてこなかったことの証左でもある。本稿では明治以前に焦点を当て、日本がどのように元号と向き合ってきたかを見ていこう。

今日でこそ日本のみで元号制度は残るが、元々は中国やベトナム、朝鮮においても用いられていた。加えて同一元号が他国で使用された例もある。近い例を挙げると明治は中国で、大正はベトナムで使われたこと等である。

次に、平安時代以降の年号の選定の手続を『国史大辞典』より概観してみよう。

代始や天変地異などによつて改元の必要が認められた場合、大臣が勅命により文章博士らに年号の文字を複数勘申させた。勘申は由来や先例などを書き上げた報告書のこと、菅原家が勘申者となるが多かった。陣の座においては大臣・参議の会議がひらかれ難陳がおこなわれた。難陳とは、公卿が難者・陳者に分かれ、双方の応酬の形で論議を重ねることである。一二、三案にまると上

奏し、さらに最終案を命ぜられて、一案を決定して上奏した。天皇はこれにより新年号を採択して改元詔書を公布した。年号の文字は『尚書』や『周易』などの中国古典に典拠を求め、過去の年号と重複しないかなどを検討して決定した。時代が下つて江戸時代になると、『禁中并公家諸法度』の第八条に「改元は漢朝の年号のうち吉例を以て相定むべし、但し重ねて習礼相熟するにおいては、本朝先規の作法たるべき事」とあり、幕府から朝廷へ制約が加えられた。朝廷からは年号勘申案を幕府に送り、幕府は儒官の林家の勘例を参考にして案を作り京都に送る。それをうけて京都では形式上別個に審議して公武同一の結論として勅定する。その結果を新年号として朝廷では公卿らに公布し、京都所司代は幕府に送付し、幕府から諸大名に通知して諸国に伝達する形となった。尚、近世においては賀茂社・稲荷社・松尾社等の神主は非蔵人としてそれぞれ出仕していた。彼らは禁裏において殿内の掃除、摂家・親王・大臣の迎送、殿上人の陪膳などを担った。近世における伏見稲荷社神主日記を読んでもみると、文政から弘化へ改元された日には新元号が既に記載され、秋に発生した地震が原因であると記されている。元号に對する高い関心から、リアルタイムで禁裏空間より情報を収集していたことが分かる。現在のニュースを見ると、新元号制定に際し国民は望ましい世界の在り方を元号に仮託していた。元号にはそれぞれの時代を反映し、願いが込められている。時代は異なれどそのことは時代を問わないものとして共有できるのではないか。

(広報委員会)

参考文献

皇室事典編集委員会編著『皇室事典』(角川学芸出版、二〇〇九年)
山本博文編著『元号』(悟空出版、二〇一七年)
国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』(吉川弘文館、一九九二年)
(閲覧に際してはジャパンナレッジを用いた)

天皇皇后両陛下御入洛御奉送迎

本年四月末、天皇皇后両陛下が、神武天皇陵での「親謁の儀」等に臨まれるため、三月二十五日から二十八日までの四日間、御入洛になされました。

御在位中最後となる御入洛にあたり、当会では平素の行幸啓にもまして、平成の御代の三十年に感謝申し上げ、京都駅、大宮御所において御奉送迎させて頂きました。

他よりも早く開く京都御苑の近衛桜が既に満開を迎えた二十六日、私は神武天皇陵へ向かわれる両陛下を御奉送致しました。春らしい

陽気の中、白砂まぶしい大宮御所正門をお出ましになる御車の御列。長閑な日差しに翻る深紅の天皇旗が見えるとともに、お見送りに集まった多くの人が降る国旗小旗より一層賑々しく音を立てお送り致しました。沿道に集まった人々、その一人一人にお優しい眼差しでお答えになるがごとくお手をお降りになる両陛下のお姿に、周囲の人々から上がる感激の声。平成の三十年間、常に国民に心を寄せ、慈しまれたそのお姿に、只々有難く、只管に感謝の思いで



お姿を拝し御奉送申し上げました。

(御嶽教末廣教会 北川真喜子)



平成六年 賀茂御祖神社御親拝

平成の御代 府内各社への 行幸啓



平成九年 孝明天皇陵御親謁



平成二十八年 賀茂別雷神社御親拝



平成二十八年 賀茂御祖神社御親拝



平成三年 平安神宮御親拝



平成六年 平安神宮御親拝



平成九年 石清水八幡宮御親拝



平成二十四年 明治天皇陵御親謁

今上陛下御即位三十年奉祝式典

畏くも天皇陛下におかせられましたは、本年御即位三十年の佳節をお迎えになられ、この佳節に全国各地で奉祝行事が賑々しく開催されています。皇室と特にご縁が深いここ京都においては、去る平成三十一年一月二十六日「奉祝天皇陛下御即位三十年感謝の誠を捧げる京都府民の集い」が国立京都国際会館の大会議場で盛大に挙行されました。



開催に当たり、神道政治連盟京都府本部を中心とする神社庁関係団体により天皇陛下御即位三十年京都奉祝委員会が平成三十年夏に組織され、(元京都府知事荒巻禎一氏が会長を務められた)当会も神社庁関係団体として参画し、当日の大会スタッフは一〇〇名、内十名の当会会員が資料の作成や外部の誘導・警備等を担当しました。

当日は、奉祝国会議員連盟会長衆議院議員 伊吹文明氏をはじめ、国会議員、府議会議員、市会議員の方々と、府下の首長、京

都経済界から、百余名が来賓として出席され、人生の先輩から次の世代を担う子供等に至るまで、国立京都国際会館の定員をはるかに超える二百名以上の方々と共に心からの奉祝の誠を捧げる事ができました。

万世一系の皇統を紡ぐ皇室の御存在は我が国の誇りであり、国民の精神的支柱です。今を生きる誰もが経験したことのない御譲位による御代替りを目前に控え、我々青年神職は天皇陛下下の大御心に少しでも副ひ奉り、斯界の最前線で活動していかなくてはとの決意を新たにしました。

四月三十日、今上陛下は御譲位され、五月一日、皇太子殿下が御即位され、それと同時に改元もされ、御代替わりがなされます。平成の時代から新たな時代に受け継がれる中で我々は今を生きています。時代は変われども本質はなにも変わらない。その本質を守り伝えていく事が我々の使命だと思います。

結びに、聖寿の万歳と皇室に弥栄を心より御祈念申し上げます。

(向日神社 六人部是充)





沖縄・京都の塔慰霊参拝団研修旅行

去る十二月十日及び十一日の二日間、神道政治連盟京都府本部主催の沖縄・京都の塔慰霊参拝団研修旅行が行われ、梶道嗣本部長を始め、総勢二十九名が参加した。

初日、先ず沖縄総鎮守・波上宮にて正式参拝。ニライカナイ信仰の祈りの聖地の一つでもある本殿裏の遥拝所を見学させていただき、沖縄独自の信仰を垣間見ることができた。

その後、本研修旅行最大の目的である宜野湾市嘉数高台公園に建つ京都の塔の前にて十七回目となる慰霊祭が斎行され、御嶽教末廣教会 北川真喜子会員、石清水八幡宮 河谷真里会員が百合の花を手に「常永遠の舞」を奉納し、京都府出身の沖縄戦戦歿者二五三六柱の御霊を慰さめ、平成の御代最後の慰霊祭が厳粛に恙なく斎行された。

二日目は早朝より普天満宮にて正式参拝。宜野湾市文化財「名勝」に指定されている普天満宮洞穴を新垣宮司様にご案内いただ

神職さんと行く伊勢参宮

平成三十一年二月二十六日、京都府神社庁主催（京都府神道青年会共催）「日本人のこころにふれるたび」と題した学生限定による「神職さんと行く伊勢参宮」が学生五十三名参加のもと開催され



き、信仰の歴史や琉球古神道について理解を深めることができた。引き続き、県内各地に鎮座する泡瀬の塔、知花美里地区慰霊碑を参拝させていただき、国の平安を切に願う人々の真心が込められていること、そして参拝すべき慰霊塔がまだ多く残されていることを実感した。

行程最後には沖縄県護国神社を参拝させていただき、国のために尊い命を捧げられた英霊に思いを馳せ、感謝の誠と、祖国平安を願い、改めて平和の尊さを知る研修旅行となった。

（八坂神社 丸茂 広知）

た。十八歳から二十歳前半、中にはベテランの域に入った方も数名参加されていた。当会からは高田・生嶋（紀）両副会長をはじめ、会員五名が参加した。

当日は晴天の下、京都八条口団体バス乗り場にて六人部美恵子・松井三紀両神社庁教化委員のパワフルであり繊細かつ配慮が行き届いた受付により定刻通り京都駅前を出発、伊勢の地へ向けてバスは走り出した。今日の参宮をより良いものにする為、車内では行程の確認が行われ、神宮に関するDVDも上映された。バスは途中、新名神高速道路土山サービスエリアに立ち寄り各自トイレ休憩を済ませ、コーヒー等を購入する参加者も見られ、車内はコーヒーの良い香りに包まれ車窓に広がる長閑な景色、そして心地よい日差しと相まっていつしか夢の中へ・・・という雰囲気であったが、それぞれ学生さんは隣りに座る友人と元気に楽しく会話を楽しんでいる様子であった。（私は睡魔とずいぶん闘っていたが・・・）

その後バスは外宮駐車場に到着。手水を済ませ、整列して神職の如くザッザッザッと規則正しく砂利を踏みしめる音を奏でながら参道を進み、もう間もなく正宮という所（古殿地前辺り）で黄砂かと見まがうほどの花粉のシャ

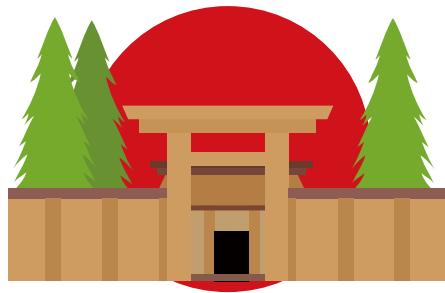


ワを浴びる事になり、さながらそれは切麻でのお祓い(お清め)のようであった。くしゃみをしながらも清まった心身にて御垣内前にて林秀俊副庁長を代表に整列して参拝。また中森圭治神社庁主事より外宮に関しての説明があり、参加者は興味深く聞き入っていた。

一行は再びバスに乗車し、内宮へと移動。内宮では元神宮職員 中西和夫様から内宮各所にて詳細に説明を賜り、参加者は、より一層理解を深めていた。続いて神楽殿にて御神楽を奉納。学生さんは慣れない正座にて姿勢を正して受けていた…が、やはり退下する際には数名、足の痺れが頂点に達していたようで、その光景は私が学生だった頃の祭式①の授業後を思い出させてくれる懐かしさであった。松大路和弘神社庁資料部委員の「すぐに立たないで痺れが治まってから立つてください」の声かけに学生さんは安堵した表情を見せていた。

神楽殿を後にして、いよいよ内宮正殿御垣内参拝へ。心地よい風が吹き抜ける中、学生さんは一糸乱れず整列して御垣内外の参拝者からの羨望の眼差しを受けながら参拝する事が出来た。

昼食は、内宮ロータリー近くの「勢乃國屋」にて伊勢名物「伊勢うどん」、「手こね寿司」のセットを皆で美味しく頂き、その後はこ



れこそが今日のメインと考えていた学生も居る「おかげ横丁・おはらい町」の散策へと繰り出し、学生さんは思いに思いにひと時を過ごした。前回より散策時間を少し長めに取ってあり学生さんは満足そうであった。その後、「神宮徴古館」では、壮麗できらびやかな御神宝類に学生は目を輝かせ館内の所々で感嘆の声を上げながら時間いっぱいまで見入っていた。帰路の車内では今日一日を振り返る学生、夢の中に誘われた学生と様々であったが、ただ共通していた事は、皆さん幸せそうな顔であった。参宮のこの日は「一粒万倍日」、どうか参加した学生さんを通して神宮のような「日本人の心にふれられる所」があつて良かったと思える方々が一人でも多く増えてくれれば幸いである。

(大將軍八神社 生寫紀之)

OB懇親会

毎年恒例のOB懇親会が、平成三十年十二月六日「祇園円山かがり火」において組織・親睦両委員会主催により開催された。会員四十九名と迎春準備でお忙しいにも関わらず、十四名のOB諸先輩方にご参加頂き盛大に行われた。

まず始めに、安井金比羅宮 鳥居肇先輩が、ご自身の現役時代に思い馳せ「たくさんの方との繋がりをどんどん増やして下さい。

知り合った分だけ、これから先の財産になります。」と乾杯のご発声を頂いた。

お鍋に箸が進み、お酒の量も増えてきた所で、恒例の親睦委員会による余興「ジェスチャーゲーム」が始まった。各テーブルよりOB諸先輩・会員問わず一名を抜擢し、お題を忠実に身振り手振りで表現した。和気あいあいとゲームが進むにつれ、大いに賑わいを見せた。



閉会に際し、伏見稻荷大社 芹口敦憲先輩により、「来るお正月にむけ、忙しい毎日に追われると思わないで欲しい。新年にお会いできる氏子崇敬者の方達に、佳き一年を過ごしてもらおう為、心を込めご奉仕して欲しい。」と激励の言葉を頂いた。

この活気をもって、迎春準備・お正月・節分祭・初午祭等々の節目の祭事に向けて、鋭気を養いOB懇親会を納めることが出来た。

(白峯神宮 北村友湖)



臨時総会・新年会

去る平成三十一年二月七日、リーガロイヤルホテル京都において平成三十年度臨時総会が開催された。会員六十九名出席のもと、先ずは神宮遙拝、国歌斉唱、敬神生活の綱領が唱和された。続く会長挨拶では六人部会長より、天皇陛下御即位三十年と新帝陛下御即位の目出度き年を迎えるにあたり、当会としても奉祝行事に全会挙げて取り組んでいきたいとの挨拶があった。

議事に先立ち議長選出が行われ、六人部会長より黒木崇史会員(北野天満宮)が指名され議長席についた。「第一号議案 次期会長選出に関する件」では生寫紀之現副会長(大將軍八神社)、「第二号議案 次期監事選出に関する件」では高田真之介現副会長(護王神社)、六人部是充現会長(向日神社)が上程され、会場一致にて承認され閉会となった。

臨時総会后、会場を移し新年会が開催。ご来賓として京都府神社庁 副庁長 田中安比呂様をはじめ京都府氏子青年連合会 会長



武本延美様、各関係業者様、OB先輩方等、多数のご列席を頂いた。六人部会長より臨時総会にて承認された次期会長・次期監事が紹介された後、ご来賓を代表し田中副庁長よりご祝辞を頂戴した。乾杯は氏子青年連合会 武本会長にご発声を賜り、祝宴が盛大に始まった。

親睦委員会の余興では、「逆ビンゴ大会」が行われ、通常のビンゴとは異なり、手元のカードにある数字が出てしまったら負けとのルールで、豪華景品も用意され大いに盛り上がった。終始和やかな雰囲気の新年会となり、結びにOB監事 芹口敦憲先輩による万歳三唱を以て閉会となった。

(賀茂別雷神社 中野瑞己)



委員会報告

組織委員会

『洛声』第二二〇号、二二二号発行

組織委員会では年に四回、会員の近況を報告する機関紙『洛声』を発行しています。この度は、第二二〇号、第二二二号を発行いたしました。

この『洛声』を通じて会員同士で情報を共有し、また親睦を図ると共に会員の組織力も強化していきたいと思えます。

会員の皆様のご協力のもと、充実した楽しい紙面をお届けできるよう作製に励んでまいりますので、皆様の近況等、情報を積極的にご提供くださいますよう、この場を借りて皆様にお願ひ申し上げます。なにか情報をお持ちの会員の方は是非お近くの組織委員までお知らせください。

(寸田 朋香)



組織委員会主催研修会

「声磨きは生き方磨き」

「全身全霊で自分を整える」



平成三十一年四月二十二日、護王神社に於いて組織委員会主催研修会「声磨きは生き方磨き」全身全霊で自分を整える」が開催された。

講師に悠話舎 鈴木愛悠先生をお迎えし、先生の経験をもとにご講演頂いた。社務の忙しい中で、忘れがちになっている自身の精神的なケア。そのケアとは発声を通じて行えるということ。参加者は互いに羞恥心を捨て、発声のイロハを実践する良い機会となった。

「発声は身体のすべての動きを意識し行い、

言葉に魂を込めるものである」

先生のその言葉は、日々神明奉仕をさせて頂いている我々神職が大切にすべきであると改めて感じる研修会となった。

(祝園神社 宮城 登志夫)

教化委員会

七五三の集い



去る平成三十年十一月十四日、八大神社に於いて教化委員主催「七五三の集い」が開催された。

この事業は児童養護施設で生活する子供たちを招待し、七五三の御祈禱を受けて頂き、レクリエーションを通じて人生儀礼を知り、将来へとつないでいくことを目的とした事業である。

当日は市内にある三方所の施設から計十二名の子供たちが集まった。六人部会長の挨拶後、御本殿にて七五三の御祈禱が執り行われた。少し肌寒い日であり、子供たちは寒さを我慢していたからなのか、緊張した面持ちで静かに御祈禱をうけていた。

その後記念撮影を行い、室内に場所を移し最初のレクリエーションとして、子供たちと一緒に紙垂を折り、しめ縄作りを行った。

紙垂に使う紙は予め切り込みがされている幼児でも折れるものを用意し、委員や引率の先生たちの手伝いを受けながら子供たちは熱心に紙垂を手にしていった。折り終えた紙垂を縄に挟み込みしめ

縄が完成。初めての作業に歓声をあげ、作成したしめ縄は各施設へ持ち帰ってもらった。

次に石清水八幡宮 田中会員によるジャグリングがおこなわれ、色々な道具を使ったパフォーマンズや、また子供たちは実際は皿回し等の体験をし、とても喜んでいる様子であった。その後、伏見稲荷大社 守分会員によるバルーンアートでは子供たちの心を掴み大盛り上がりの中、生寫紀之副会長による挨拶にて閉会した。

今回は教化活動として、神社に関連するレクリエーションができないかと委員会と考えたところ、神社にお参りした際に目にするであろう「しめ縄」を作るという案があがった。実際に行ってみると子供たちは折り紙をする感覚に似ていたのか、非常に楽しげな様子であった。今回のレクリエーションを通じて今後も子供たちが神社に興味を持つ教化活動に励み、次世代へと信仰が続いていくことをよう努力したいと思う。

(伏見稲荷大社 守分 仁成)

事業委員会

平成三十一年カレンダー作製

事業委員会では、株式会社秋江様、京都奉製株式会社様のご協賛により、今年も京都府内関係神社の祭典日を掲載したカレンダーを作製致しました。

平成三十一年版は、京の地において江戸時代より続く、染司よし

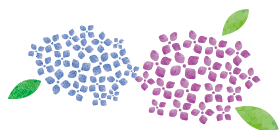
おか様にご協力いただき、『植物染のかさね色目』をテーマとしております。

かさね色は、平安時代中期頃から花開き、古来より自然の中に神の存在を感じ崇拝する日本人は、四季それぞれに移りかわる草木花の美しさをとらえて、詩歌に、文章に、そして自らまとう衣装にその彩をうつしてきました。

カレンダーに掲載されております『紅梅・桜・杜若・流水・菊・紅葉』のかさね色目をおして四季の彩り、移ろいを感じていただければ幸いです。

平成三十年十一月九日、伏見稲荷大社に於いて事業委員会を中心に会員数名助勢のもとカレンダー発送作業を実施し、京都府内各神社に頒布致しました。

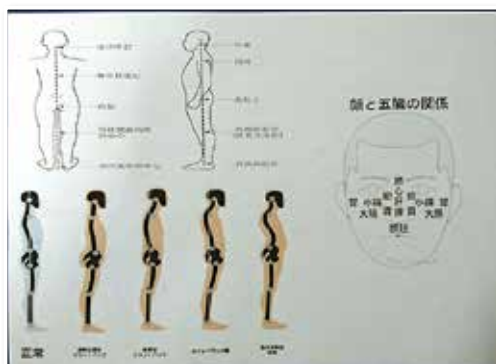
(伏見稲荷大社 黒木章弘)



広報委員会

広報委員会主催研修会

「身体のメンテナンスの重要性」



藤森神社参集殿に於いて平成三十一年二月二十日、広報委員会主催研修会が開催された。十三名の会員の参加のもと、講師に青村鍼灸整骨院 田村直先生をお迎えし「身体のメンテナンスの重要性」と題し研修会は始まった。

まず田村先生より人間の身体の仕組みについてご説明があった。人間の姿勢は「中心とバランス」であり、人間もバランスが悪いと倒れるため、筋肉が支えている。

姿勢を保持することは筋肉にとって負担となり、例えばパソコン器具やスマートフォン等を長時間同じ体勢で使用する事は、身体の重心が前にある前傾姿勢でバランスをとるため、肩や腰の筋肉に負担がかかり、痛める原因になるという事を教わった。

その後、二人一組で互いに直立の状態での姿勢をチェックし、背骨や骨盤を動かし、個々の姿勢に合った身体のケアやメンテナンスの仕方、ストレッチ方法を教えていただいた。

渉外委員会

西陣連合青年会との交流会

渉外委員会主催による「他団体交流会」。今回は西陣連合青年会の皆様と平成三十二年三月十一日「まんざら亭 仏光寺烏丸」に於いて開催された。

当日は西陣連合青年会から十名、当会から十三名の総勢二十三名参加のもと行われた。

六人部会長の挨拶後、西陣連合青年会より西陣織について映像



会員の多くは、普段行わないストレッチに痛々しい顔をしていたが、研修会後には、皆スッキリとした表情になっていた。参加者一同、身体のケアがいかに大事かを実感した有意義な研修会であった。

(八坂神社 福本翔二郎)

や実際の生糸・生地などに触れながらご講演を賜った。

時代の変化と共に衰退しつつある西陣織の伝統を守りながらも、時代に合った新しい形に発展させているという話は、同じ伝統文化を守る立場である神職にとっても共感できる部分は多く、見習う所が多々感じられた。

その後、西陣連合青年会 岡本会長より乾杯の発声を頂戴し、お酒や料理に舌鼓を打ちながら歓談となった。

普段、私達も守札や祭具などで触れる機会の多い西陣織ではあるが、職人の方との交流というのは貴重なもので、大変有意義な交流会となった。

(北野天満宮 堀川雄矢)



ヤチマタ募金活動



交通安全推進運動であるヤチマタ募金活動が、二月三日、吉田神社の境内に於いて、また三月二十五日、北野天満宮の境内に於いて行われました。

二月三日の吉田神社と云えば、全国的に知られる節分祭が有名であり、多くの方がご参拝に来られます。しかし当日は、午後より生憎の雨模様。それでも社務を終えた十四名の会員は、傘を片手に雨の中、精力的に活動し、多くのご参拝の方より一四、九九七円という温かいお気持ちをご頂戴致しました。

また、多くの梅の花が咲き、芳しい香りが漂う梅を愛でる方や、合格祈願のお礼参りの方々で賑わう北野天満宮では、楼門周辺にて大きな声で募金と呼びかけ四〇、一七四円という温かいお気持ちを頂戴致しました。

今後もこのヤチマタ募金活動を京都府神社庁と共催にて、積極的に活動を継続していきますので、会員の皆様方のご協力の程、宜しくお願い申し上げます。

(賀茂別雷神社 有島 昌延)



近畿地区報告

一・二七御堂筋パレード

去る、平成三十一年一月二十七日に国旗掲揚推進事業である『一・二七御堂筋パレード』が開催された。

この事業は、一月二十七日の「国旗制定記念日」にあわせて、国民の祝祭日にどの家庭でも国旗が掲揚されることを願い御堂筋をパレードし呼びかけるものであり、毎年一月二十七日に日本会議大阪主催・大阪府神道青年会協力で開催されている。



当日、午後三時三十分に大阪市中央区に鎮座する坐摩神社境内に集合。パレードに先立ち出発式がとりおこなわれた。そして午後四時より大国旗を捧持した神道青年近畿地区連絡協議会 上野副会長を先頭として、参加者一同が四列縦隊二梯団を組んで出発した。先導車の搭載のスピーカーから、

「二月二十七日は国旗制定記念日です。祝祭日には日本の国旗、日の丸を揚げましょう」

とアナウンスが流れ、参加者一同は手に持つ日の丸の小旗を振り、力強く声高らかに「揚げましょう」と唱和した。道中においては日本会議大阪や大阪府神道青年会の運営スタッフが、日の丸の小旗や日の丸ステッカー入りティッシュや風船などを沿道の人々に配布して国旗掲揚を呼びかけていた。今年は日曜日と重なったこともあり沿道には大勢の人がいて注目の的であった。本町から御堂筋を通り難波までの道を警察指示のもとで約一時間行進し午後五時すぎに難波に到着して解散となった。今回のパレード参加者数は、約三百名であった。

私は今年も御堂筋パレードに参加させていただき、このパレードで沿道を行き来する人々に国旗掲揚の推進のアピールが出来、熱

い関心を少しでも得ることができたのではないかと感じました。歴史ある事業に参加できましたこと感謝申し上げます。

(向日神社 六人部 是充)

近畿地区臨時総会・第二回連絡会

平成三十年十二月四日、ホテル日航奈良に於いて、神道青年会近畿地区連絡協議会臨時総会並びに第二回連絡会が開催され、当会より六人部会長を始め九名の会員が参加した。

先ず本会に先立ち研修会が行われ、春日大社 宮司 花山院弘匡様を講師に迎え、「春日大社御創建一二五〇年」を演題として春日大社の創建からの歴史を始め年中行事など詳細に講演を賜った。



研修会の後、臨時総会並びに第二回連絡会の議事に移り、次期会長に和歌山県神道青年会上野潤会員、次期監事に和歌山県神道青年会 前芝弘知会員、大阪府神道青年会 新海隆広会員が上程され全会一致で選出された。続いて、中央報告、特別委員会報告などの各種報告がなされ、近畿各神道青年会の報告に於いて、

今上陛下御即位三十年の奉祝行事について報告がされた。

当会では六人部会長より、平成三十一年一月二十六日に国立京都国際会館にて「奉祝 天皇陛下御即位三十年 感謝の誠を捧げる京都府民の集い」が京都府神社庁のもと、盛大に開催される予定である旨が報告された。

また、来たる今上陛下の御譲位・新帝陛下の御即位を寿ぐ奉祝行事を催していきたい旨、報告された。

そして、長谷川監事先導により聖寿万歳、田中会長の閉会の辞にて本会は閉会した。

引き続き懇親会が行われ参加者一同和やかな雰囲気の中懇親を深め散会となった。

(石清水八幡宮 林 秀明)

近畿地区第三回連絡会・地区研修会

去る三月十九日、二十日、二日間に渡りTHE KASHI HARAに於いて平成三十年度神道青年近畿地区連絡協議会第三回連絡会並地区研修会が開催された。

連絡協議会に先立って春日大社国宝殿主任学芸員 松村和歌子先生をお招きし、「興福寺と春日大社」と題した講演を賜った。講演の内容は主に興福寺、春日大社の造り、またそれぞれの歴史等の話だった。興福寺の内陣には十メートル以上の柱が六十六本



必要で、昔から用いていた材料は現在調達不可能である。しかしながら、カメルーン産の似たような材料を用いることで現在復元することが可能となり、新たなアイディアによつて、今の興福寺は復元することができた、と松村先生は仰っていた。古くからの伝統は、大事であり守っていかなければならない。しかし、新たなアイディアを出さないとその伝統を根本から潰してしまうのではないかと、考えさせられた。

講演会后、第三回連絡会では、奈良県神道青年会 井関理事の司会により進行し、座長には慣例により当番県の会長である奈良県神道青年会 多田会長が選出され、議事に移った。まず、神道青年近畿地区連絡協議会 田中会長による中央報告、次に特別委員会による報告、近畿地区事業委員会による報告、その後各単位会長による報告がなされ、滞りなく連絡会は閉会した。

連絡会後は会場を移動し、懇親会が開催された。懇親会には来賓として、奈良県神社庁 副庁長 樋口俊夫様、橿原神宮 宮司 久保田昌孝様、神道青年近畿地区連絡協議会 参与 佐伯雅寿様、同じく神道青年近畿地区連絡協議会 参与 持田照久様をお招きし、終始和やかな雰囲気の中懇親会だった。

翌日、橿原市から奈良市の興福寺へ移動し、現地職員の案内の元中金堂の中を拝観した。前日に講演会で勉強したからなのか、会員は皆興味津津の様子であり、多くの質問が飛び交っていた。その後、平城京跡地にある天平うまし館で昼食を取り、午後より西大寺へ向かった。西大寺では大茶盛を体験し、見たことがないような大きな茶碗でお茶を堪能した。

二日間に渡る連絡会並びに研修会はここで幕を閉じた。他府県の青年神職との交流は大きな刺激になり、自分の成長の糧になることを改めて感じた二日間であった。

(石清水八幡宮 宮田雄生)



近畿地区「ボウリング大会」

吹き荒れる強風と雲行きが怪しい天気の下、なにやら不穏な空気が覆っていた五月二十日。神道青年会近畿地区連絡協議会新元号元年「ボウリング大会」が開催された。

本来ならば恒例の野球大会であったが、大会の一週間前より悪天候予想。その天候は大会目前になっても覆らず、急遽ボウリング大会に変更される旨が前日に決定された。各府県の神道青年会有志は、野球大会に向けていたその思いを心に秘め、“打倒京都”を掲げ、奈良県橿原市の地に集結した。

定刻正午、開会式では近畿地区連絡協議会 田中会長より冒頭

「天気については触れないように」など自虐的な挨拶を交え、周囲に笑顔をもたらした。その後、田中会長・上野次期会長の両名による始球式が行われ、戦いの準備が整った。当会からは稲本監督をはじめ七名が参戦。初の近畿大会連覇に向け、円陣を組んだ。“優勝旗を持つて帰る”ただそれだけを胸に誓い、静かに闘志を燃やした。

ゲームは各府県対抗の三ゲームのアベレージを争う。間もなく





序盤、同じく円陣を組み、結束力を強めていた滋賀神青、チームメイトのプレーに一際歓声を沸かせ、大いに盛り上がりを見せる傍ら、隣では破壊力抜群とも言える豪快な投球を見せ、確実にスコアを重ねる大阪神青。京都神青は序盤より中盤に向けて波に乗り、林会員が二一六という圧倒的スコアを叩き出し、一気に周囲の注目を集めた。この活躍に触発されたのが先輩である梶会員。自称忍法を駆使し、奮闘する姿を見せチームを支えた。この勢いのまま突き進みたい所ではあったが、野球大会に向け、調整を図ってきた選手達。重さ約五、五キロの球を二時間近く投げ続けるのにもさすがに限界があった。ゲーム終盤、各チーム徐々に疲労の姿を

見せ始め、腕の痛みを訴える会員が続出。序盤の勢いを取り戻せず、軌道修正も出来ずに敢えなく失速。

競技終了後には各チーム笑顔が少なく、想像以上に苦しい持久戦が強いられた様子であった。

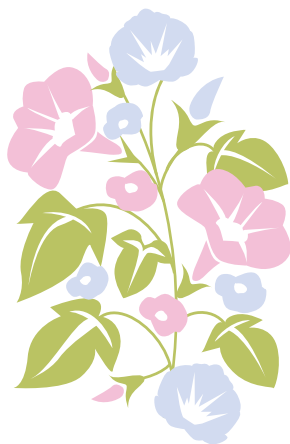
長い戦いを終えた一同は順位発表を心待ちに、懇親会場である檀原神宮養生殿へ向かった。数少ない交流の場、近畿地区の青年神職と親睦を深めている中、お待ちかねの表彰式が始まった。

下位より順位を発表される中、

三位に京都神青の名が呼ばれた。その瞬間、周囲がざわめき始め、首位奪還の圏内に入った大阪・滋賀はおおいに期待の声を上げた。栄えある優勝を物にしたのは大阪神青。ゲーム序盤より蓄えた貯金を保持し、独走を貫いた。今回、不運にも天候に恵まれず、連覇を狙う京都にとっては不本意な結果となった。数多の強者の集う中、京都のMVPには六人部会長が輝き、会長として有終の美を飾った。

優勝旗を明け渡し、追われる立場から追う側に戻ってしまった当会。来年は、稲本監督の采配のもと、もう一度優勝旗を取り返し、京都神青の黄金時代を築いていきたいと誓ったボウリング大会であった。

(北野天満宮 川村亮滋)



中央報告

神青協中央研修会

去る三月十三・十四日の二日間にわたり、平成三十年度神道青年全国協議会中央研修会が茨城県水戸市の水戸プラザホテルにて開催された。全国各地より約三百五十名の青年神職が集い、京都からは三名が参加した。

本年の研修会では『氏子と共に歩む時〜過去・現在・未来の中で』を主題とした研修会であった。

第一講では鹿島神宮 宮司 鹿島則良様より『神に仕えて想うこと〜鹿島の神と水戸の教え、そして鹿島神宮の中〜』と題して、鹿島神宮の過去から現在、水戸学、神職と氏子と神社の未来、などについてご講義頂いた。講義の最後に「何をするにもまず神様に伺いを立て、神様の気持ちを忖度出来る神職になって下さい」との言葉に会場全体が静かに頷いているように感じた。

第二講では脳科学者で医学博士でもある中野信子先生による『現代社会と氏子〜科学の力と祈りの力〜』と題した講義で、科学的な目線から、日本人の宗教観、科学と宗教が互いに手を取り合う重要性、劇的な変化をしている時代の中で氏子と神社をどう繋いでいくかについてなどをご講義頂いた。その中で脳科学の方向から見た時、宗教体験をする場合は脳の発達の関係性で七

歳以降が望ましいというお話があり、教化活動にも繋がる貴重なご講義であった。

第三講では大洗町を舞台にしたアニメ「ガールズ&パンツァー」の仕掛け人のひとりである常磐良彦先生、大洗町観光協会会長の大里明先生、ガールズ&パンツァープロデューサー杉山潔先生、三人の先生方より『氏子の未来とまちづくり〜神社を中心とした地域活性化の可能性〜』と題したご講義を賜った。神社だけでなく、地域全体を活性化することにより、神社と氏子の関係が強くなり、それがまた地域活性化のループに繋がる。神社が紡いでいかなければならない大切なものは、人と人であるという神社の在り方を考えさせられる内容であった。

全三講の講義を終え、時代が進む現代において、忘れ去られつつある日本の長い歴史を我々青年神職が率先して先頭に立ち、歴史の中で今に生かされていることを自覚し感謝する。これを伝える紡いでいくのが使命であると感じさせられる研修会となった。

(石清水八幡宮 私市靖)



編集後記



「内平かにして外成る」。

平成という時代から令和という新しき御代へと移り変わる真つ只中。本号は、天皇陛下の御即位を奉祝するとともに「元号」について焦点を当てて誌面を作製致しました。一人でも多くの皆様に御清覧賜れば幸いです。

六人部会長の下、発行して参りました『山紫水明』も、この第三十七号を以て、当委員会での最終号となりました。二年間の任期中、社務等ご多忙にも関わらず快く執筆下さった皆様、編集作業にご協力頂いた各位には深く感謝致しております。本当に有難うございました。不甲斐ない委員長にて、甚だ力量不足のことが多く、執行部・役員はじめ委員の皆様には大変ご迷惑をお掛け致しましたこと、今更ながらお詫び申し上げます。『山紫水明』を心待ちにされている皆様のご期待に添えたかどうか不安が拭えませんが、任期中滞りなく発行できました事に今は只々安堵致しております。

次回号からは新体制での新しい「色」の会報が発行されると存じます。会員はもとより先輩諸兄に至るまで、今後とも広報委員会への倍旧のご協力を何卒お願い申し上げます。

最後にこの二年間、一番近くで支えて下さった当委員の皆さんからのお声をもちまして『山紫水明』第三十七号を締めくくりたいと思います。

【西野】二年間ありがとうございました。

【東條】北川委員長お疲れ様でした。

【私市】実りある二年でした。有難う御座いました。

【綾小路】北川委員長が真摯に『山紫水明』に向き合う姿は、私に今後神青活動に取り組む上での大きな事を教えて下さいました。有難うございました。

【本石】御世改まりて、京都神青の益々に栄えまさん事をお祈り申し上げます。

【馬淵】二年間有難うございました。『山紫水明』を通じて色々と学び

成長させて頂きました。

【中野】楽しく活動できました。ありがとうございました。

【宮田】有意義な二年間でした。

【吉田武】この活動で得た経験をこれからも活かしたいと思います。有難うございました。

【山本】広報委員会の活動を通して様々な事を学びました。この経験を活かしてこれからも頑張っていきたいです。

【福本】北川委員長、すごく頑張って頂きました。ありがとうございました。

【上島】今後もお世話になります。

【吉田朋】『山紫水明』の執筆につきまして大変勉強になりました。誠に有難うございました。

【黒崎】私自身ほとんど参加が叶いありませんでしたが、皆さん、本当にお疲れ様でした。

【黒木】優しい委員長で良かったです。

【北川】…この二年間、本当に本当に、有難うございました！
ビバー！広報委員会！ シーユアゲイン。



『山紫水明』第一三七号

題 字 頼新先生
編 集 広報委員会
発行所 京都府神道青年会
発行日 令和元年六月三十日
印 刷 株式会社ユニティー